

主題	一人ひとりに合った適切なトロミ濃度と誤嚥性肺炎入院者の相関について
副題	トロミ濃度の統一規格化による誤嚥性肺炎の減少
適切なトロミ濃度	
誤嚥性肺炎	

研究期間	18ヶ月	事業所	社会福祉法人徳心会 いずみえん
発表者：稲垣孝（いながきたかし）		アドバイザー：菊谷武（きくたにたけし）	
共同研究者：川田順子（かわだじゅんこ）深井薫（ふかいかおる）小寺義成（こでらよしなり）			

電 話	03-3759-5550	メール	kaigo@tokushinkai.jp
FAX	03-3759-5634	URL	http://tokushinkai.jp

今回発表の事業所やサービスの紹介	大田区にある福祉施設で、平成16年8月の開園です。老人福祉サービスと障害福祉サービスを提供する複合施設であり、特別養護老人ホームにはショートステイ利用者を含む160名（個室38室、4人部屋28室）、デイサービス40名となっています。障害者支援施設はショートステイを含めて54名です。
------------------	---

《1. 研究前の状況と課題》

本施設では、以前から専門職（管理栄養士や言語聴覚士）の指導のもと、適切な食形態を提供していた。しかし、依然誤嚥性肺炎が発生していたという現状があった。今回水分のトロミに関して研究を行った経緯として、誤嚥性肺炎が減少しない理由の一つを、「利用者に合っていないトロミ」にあるのではないかと考えた。本施設ではトロミのマニュアルがないため、トロミ濃度は職員により個人差があった。ダマ・分離しているトロミ、硬すぎるトロミを提供しており、知識が乏しいためそれが危険かどうかを理解していない職員が多く存在していた。長年の介護経験による保守的な職員などは、専門職の助言を容易に受け入れることなく経過していたという現状もあった。その為、職員のトロミに対する正しい知識と、提供するトロミ濃度の適正化が課題となっていた。

《2. 研究の目標と期待する成果・目的》

適切なトロミ濃度は、本人が咽なくなる最もゆるいトロミである¹⁾と菊谷氏は述べている。それ以上でも以下でも、嚥下障害を呈した利用者には危険な飲み物になってしまう。

ダマ・分離しているトロミ、硬すぎるトロミは嚥下に不利である。特にダマのあるトロミはダマの大きさによって窒息の恐れもある。また、合っていないトロミによって飲み込みにくい状態が続くと水分や栄養が不足し、体力低下に繋がる²⁾。そして、高齢者の死因の第3位である肺炎の原因として、嚥下障害に伴う誤嚥を考慮しなければならない³⁾と藤島氏は述べている。それらの理由から、職員のトロミに対する知識を深めると同時に、利用者にとっての適切なトロミの量を特定することにより、利用者の誤嚥性肺炎や肺炎による入院者を減少させることを目標とした。

《3. 具体的な取り組みの内容》

まず、職員の意識を把握するため、トロミについての意識調査を実施した⁴⁾。その結果、全体的に意識が低いことやトロミの知識が不十分であること、また知識はあっても実行に移せていない事実が判明した。このような結果から、職員全体にトロミの重要性を浸透させる必要があると考えた。歯科医師主導のもと勉強会を開催し、嚥下基礎知識、誤ったトロミの付け方による危険性、トロミの濃度を統一させる事の重要性を発信した。その後、言語聴覚士にて全ての利用者の嚥下評価を実施し、その結果に基づいた一覧表を作成した。1年半後、再度同じ内容の意識調査を実施、効果を測定した。

《4. 取り組みの結果と考察》

嚥下評価を行うまでは、ほぼ全利用者に対して硬すぎるトロミを付けていたことが判明した。当初の意識調査の結果からも、硬いトロミのほうが安全である、との誤った認識を持っていた職員も多数存在していたことが判明した。上記の取り組みの結果、誤嚥性肺炎が減少し、肺炎による入院者も減った（年間延べ日数で856日減）。1年半後の意識調査では、トロミに対する職員の意識は大幅に向上し、同時に咽せや窒息に対しての危険意識も高まっていることがわかった。また、施設で購入しているトロミの量の減少、そしてトロミ一覧表により、短期入所や新規入居の利用者のトロミ付けに迅速に対応することが可能となり、業務効率化にも成果がみられた。誤った知識を新人職員へ受け継ぐことも無く、一人ひとりがトロミに対する臨機応変な対応ができるようになった。それにより、今後も誤嚥性肺炎は減少していくと見受けられる。ただし、意識調査の結果の中に、「慣れによる意識の薄れ」が懸念されていることも判明した。今後の課題は、この成果をいかに維持していくかということである。

《5. まとめ、結論》

今回の取り組みの一番の目的は、職員全体にトロミの特性を知ってもらい、曖昧なトロミの付け方を見直して統一させることにより、発生している誤嚥性肺炎を減少させる事だった。その取り組みの結果、トロミ濃度統一化はもちろんのこと、嚥下に関する興味を向けることにまで成功し、職員全体のレベルアップにも繋がった。今回、1つの課題を解決していく過程で他の問題を発見し、多くの問題を解決できたということは大きな成果であった。

《6. 倫理的配慮に関する事項》

なお、本研究発表を行うにあたり、ご家族に写真等の取扱いについて書面及び口頭にて確認をし、本研究発表以外では使用しないこと、それにより不利益を被ることはないことを説明し、回答をもって同意を得た。

《7. 参考文献》

- 1) 菊谷武：「食べる」がまるごとわかる本、メディカ出版,2012
- 2) 向井美恵：飲み込みにくい方へ、ヘルシーフード株式会社,2013
- 3) 藤島一郎：摂食嚥下リハビリテーション、中山書店,2006
- 4) 社会福祉施設における人材育成マネジメントガイドライン：東京都福祉保健局,2011

《8. 提案と発信》

利用者の重症化に伴う嚥下障害は本施設だけに止まらず全国的な問題であると考えます。そのために摂食嚥下に力を注ぎ、職員教育や研究結果を発信する事により高齢者福祉のレベルアップに役に立てれば幸いです。

【メモ欄】